

# 花うさぎの「世界は腹黒い」2

日本が普通の国になるように。産経新聞を応援しています。

キムタクがあつた「宗谷」を救った？ (2011/10/28)

(<http://hanausagi2.iza.ne.jp/blog/entry/2490191/>)

別冊正論が特集「わが子に語りたいた知られざる日本人の物語」

「元気がないのか？ 俺(宗谷)はここにいます。いつでも会いにおいで」

花うさぎ 2

検索

<http://hanausagi2.iza.ne.jp/blog/>

一週間ほど前に馴染みの書店に行ったら、ご覧のような表紙の別冊正論が置いてありました。「わが子に語りたいた日本人の物語」とあります。うん、楠木正成に西郷さん、乃木希典に...とお馴染みが一杯だろうと思って目次ページをみたら、「し、知らない人の名前がズラリ」で焦ってしまいました。で、タイトルをもう一度よくみたら「知られざる」が入っているのですね。

いや～勉強になります。これは私たち日本人を元気にしてくれる一冊ですね。この雑誌は皆さんに是非ともお勧めしたい、教科書にも掲載すべき内容がぎっしり詰まった貴重な内容だと思います。このなかで、フジテレビ抗議デモの集合場所にも使われた「船の科学館」に係留されていた「宗谷」の物語が登場します。

私の年代だと、「宗谷」と言えば、南極観測、南極と言えば「タローとジローが生きていた！」と日本中が湧いたのをハッキリと記憶しています。その「宗谷」と、宗谷を建造した川南豊作氏の物語をジャーナリストの桜林美佐さんが九ページにわたって書いた記事が収録されていますので、以下で最初と最後を抜粋してお届けします。

なんと、現在TBSで放送されている「南極大陸」が、解体寸前だった「宗谷」を再び生きながらえさせた、キムタクが「宗谷」を救ったと言うのです。知らなかったですね。桜林美佐さんといえば、防衛産業や自衛隊で素晴らしい感動的な執筆をしてきている赤丸急上昇のジャーナリストですが、良い仕事をしてくれています。正直、「いいぞ～キムタク、キムテヒを吹っ飛ばせ！」という気持ちもあるのですが。

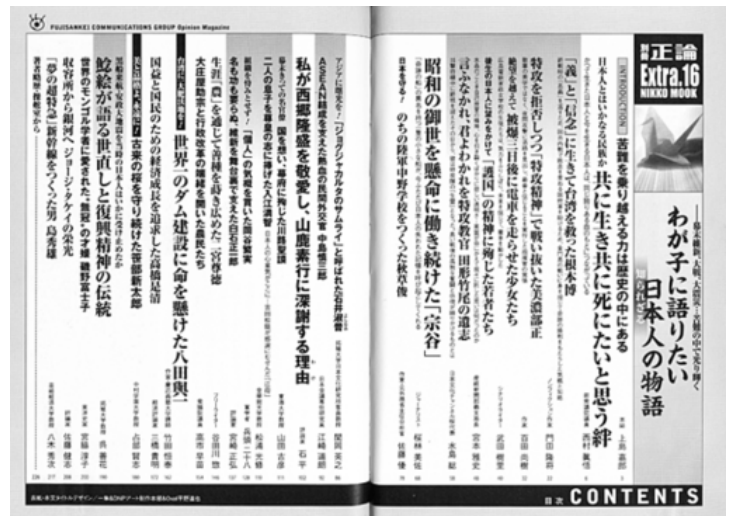


みと見入っている中高年男性の姿も多く見られた。この二隻の船が、日本のお父さんたちに訴えるものの大きさがよく分かる。

船の科学館の休館は、運営元である日本海事科学振興財団を支える競艇事業による収入が、東日本大震災などの影響もあり激減していること、同館の老朽化など様々な要因が重なった。そして、このことは「羊蹄丸」と「宗谷」にとっても、その生涯を閉じることを意味していた。

そもそも、これらの船のメンテナンスなどは、それぞれの関係者など有志の皆さんがボランティアで担っていたのだが、海上に浮かんでいる状態で維持するためには、億単位の莫大な経費がかかり、これまで騙し騙し維持してきたのが現実だった。

「羊蹄丸」は休館とともに手放されることになり、引き取り先を募集。いくつかの応募があったというが、難しい船の維持管理を実際にできる所は限られ、慎重に選考が進められている。



別冊正論16号 目次ページスクリーン画像(クリックでHP)

そうした中、よもやスクラップかと思われた「宗谷」に関しては、そのまま同じ場所で展示が続けられることになったのだ。本館も「羊蹄丸」もクローズする中で、「宗谷」だけが...、確かに「すごい強運」とはこのことだ。

「あの『キムタク』のおかげだと言っていいでしょう...」あまり知られていないが、「宗谷」は大日本帝国海軍所属の艦艇として今でも海に浮いている唯一の存在だ。ミッドウェー海戦、魚雷の命中、トラック島の空襲...と、数々の危機を潜り抜けてきた「宗谷」、その最大のピンチを救ったのが「キムタク」こと木村拓哉とは？ともあれ、この船が現代の日本人を元気づける存在であることは間違いのない。「奇跡の船」という異名を持つ「宗谷」の数奇な運命を辿ってみたい。

## 昭和の御世を懸命に働き続けた「宗谷」

ジャーナリスト・桜林美佐

海軍特務艦から輸送船、引き揚げ船、戦後復興を果たしての南極観測船...。「奇跡の船」の異名を持つ一隻の小さな船が、今ふたたび日本人の失われた記憶を呼び起こしてくれる。

「信じられないほどの強運です...」

九月最後の連休、東京・お台場の「船の科学館」には、大勢の家族連れなどが訪れていた。同館が九月いっぱい休館となるということで、係留されている青函連絡船「羊蹄丸」や初代南極観測船「宗谷」の前で記念撮影をする人たちが、また一人で来館してしみじ



下記「南極大陸ナビ」の動画からキャプチャー



『花うさぎの「世界は腹黒い」』お勧め動画  
マスコミが報じない正しい歴史、日本が好きなのは必見！  
「凜として愛」「氷雪の門」「誇り～伝えよう日本のあゆみ～」  
「めぐみ」「日本がアジアに残した功績」「真実はどこに...」

わからない事は調べましょう！

検索

iza プログランキング  
【全体】4位 【政治】1位  
(2011年10月8日時点)

# 花うさぎの「世界は腹黒い」2

日本が普通の国になるように。産経新聞を応援しています。

キムタクがあつた「宗谷」を救った？ (2011/10/28) 2/3  
(<http://hanausagi2.iza.ne.jp/blog/entry/2490191/>)

別冊正論が特集「わが子に語りたいた知られざる日本人の物語」

「元気がないのか？ 俺（宗谷）は  
ここにいる。いつでも会いにおいで」

花うさぎ 2

検索

<http://hanausagi2.iza.ne.jp/blog/>

## 戦いの海で見せた奮闘と強運

昭和十一年三月、陸軍の青年将校たちが「昭和維新」を合言葉に決起した二・二六事件から一ヵ月後のことであった。当時三十五歳だった川南豊作という一人の男が手漕ぎボートに乗り、長崎県の香焼島（こうやぎじま）に降り立った。若くして、すでにガラス製造工場の経営者であった川南は、かつてこの場所にあり閉鎖されたまま放置されている造船工場を買い取り、自社製品の船による輸送手段を自前で確保しようと考えていたのだ。

とはいえ、全くの造船の素人が、船を造るところから始めようという無謀な試みに、周囲の反応は冷ややかで、廃墟となった工場跡に足を踏み入れた川南自身も、まだ決断しきれずにいた中での現地視察だった。

その時、「何をしているんだ！」

彼らの前に立ちはだかったのは、ぼろぼろの服をまとった老人で、聞けばかつてこの工場で守衛長を務めていたのだという。工場が閉鎖されて十年以上経っていたが、一日も欠かさず無償で警備を続けていたのだ。「お世話になった社長のため」と、毎朝、定刻にやって来て警備を行い、夕方、終業の鐘を鳴らして帰宅する。

台風の日などは、夜中でも見回りに来る。収入がないためか、乞食同然の身なりであったが、その口ぶりには嬰鐸（かくしゃく）たるものがあつた。

「ここを買おう、あの老守衛を顧問で迎えて、元社長にも来てもらおう」

老守衛の忠義と、一人の男にそこまでさせる元社長の人柄を見込んで、川南は即座に決心してしまう。

かくして誕生した造船工場であったが、長崎と言えば、三菱重工長崎造船所のご当地であり、新参者の出る幕はない。信用もなく、さしたる受注もないだろうと思われていたが、早速、意外な所からの発注があつた。

ソビエト連邦である。この頃ソ連は、カムチャツカ半島沿岸で使用する音響側深儀を装備した耐氷型貨物船三隻をいちどきに建造できる造船所を探しており、できたばかりの造船所にも白羽の矢が立ったのだ。またとないチャンス、なんとしてもこれを受注したい川南は格安で落札し、建造に漕ぎ付けることになった。



10月3日 南極大陸ナビ

元造船工を呼び寄せてはいたものの、半分はガラス工場にいた者で取り組んだ作業は困難を極めた。なんとか二隻を建造し、昭和十三年、最後に出来上がった三隻目が「ポロチャエベツ」であった。しかし、その頃、日ソ間の情勢に暗雲が立ち込めており、海軍佐世保鎮守府より「ソ連に渡してはならぬ」というお達しを受けることになる。海軍としても、対ソ戦を睨んだ船のニーズもあり、「渡り

に船」で、三隻のうち最後の一隻「ポロチャエベツ」を買い取るようになった。

ソ連との交渉が難航している間、この船は一時期「地領丸」として運航を始めていたが、昭和十四年には海軍籍となるのが正式に決まり、十二センチ単装高角砲二門と二十五ミリ連装機銃二基を装備。船名は「宗谷」と名付けられた。（中略）

## 宗谷、生みの親の生涯

川南は昭和四十三年、六十六歳でその生涯を閉じた。明暗を分けた「宗谷」と川南、しかし、「宗谷」の歩んだ生涯は、川南の日本に対する愚直なまでの思いと重なるように見えるのは私だけだろうか。

廃墟となった工場を守り続ける老守衛、その姿に「日本人はかくあるべし」と心打たれ、造船業に乗り出した川南、その存在があつたからこそこの「宗谷」であり、その運命の延長線上にあの南極観測船としての功績もあるとは言えないだろうか。



日本初の南極観測船 「宗谷」の70歳(古希)を祝う

占領下で禁じられていた国旗掲揚が許され、日章旗を掲げた「宗谷」が出港することに歓喜した日本人が、今はその喜びも忘れて、「国のため」という精神を葬り去ってしまったように見える。都市の再生・発展はその記憶を完全に埋没させるに足る目まぐるしさだった。経済成長という言葉のどこかに虚無感が残った。

そんな私たちの記憶を呼び覚ますように、十月から木村拓哉主演のドラマ「南極大陸」がTBS系で放映される。とりあえずではあるが「宗谷」は残されることになったのである。キムタクも「宗谷」のファンになった。「アイツってね、信じられない強運の持ち主なんだよ。戦争にも出ているんですよ」雑誌のインタビューにこう答えている。

「戦後、何もなくなったところから、力を尽くして南極に行った人たちがいるという、過去の事実を新たに知るきっかけのようなものになってくれればいいなと...」

川南豊作から木村拓哉まで、時代の寵児を虜にしながらここまで来た一隻の小さな船。「宗谷」は日本人の失われた記憶を呼び起こしてくれる。

「元気がないのか？ 俺はここにいる。いつでも会いにおいで」

お台場の波の上でそう語っているように見える。

(別冊正論第16号 P68-P70 P75-P76より抜粋)



『花うさぎの「世界は腹黒い」』お勧め動画  
マスコミが報じない正しい歴史、日本が好きなのは必見！  
「凜として愛」「氷雪の門」「誇り～伝えよう日本のあゆみ～」  
「めぐみ」「日本がアジアに残した功績」「真実はどこに...」

わからない事は  
調べましょう！

検索

iza プログランキング  
【全体】4位 【政治】1位  
(2011年10月8日時点)

